巻 頭 言

仙台市立病院院長　　奥　田　光　崇

仙台市立病院医学雑誌第40巻が電子版として刊行されることとなりました．本号には原著6編，症例報告9編，コメディカル・レポート2編のほか，昨年発行された学位論文，学会報告，院内剖検記録等が収載されています．日常業務が多忙な中，編集作業に取り組まれた刈部委員長をはじめとした編集委員，査読委員の方々，そして貴重な臨床経験，研究結果を論文にまとめ投稿していただいた方々に感謝申し上げます．

令和2年は新型コロナウイルスが発生，蔓延した年であり，年末の現在もまだまだ収束とは程遠い状態にあります．仙台市立病院では第2種感染症指定医療機関として多くの新型コロナウイルス感染症／疑似症患者の入院，外来診療にあたってきました．当初は実態が十分解明されておらず強い緊張感に包まれたスタートでしたが，これまでのところ一人の院内感染も発生しておらず，患者さんも皆さん順調に回復しています．感染対策室による徹底した指導，対応にあたるスタッフの細心の注意と丁寧な対応，そして，職員一人一人が医療従事者としての強い自覚のもと，業務以外の面においても感染防止に努めた結果であり，誇れるものと思っています．

さて，世間では新型コロナウイルスが大きな注目を集めましたが，病院で行われている膨大な医療の中において，新型コロナウイルス対応は実はほんの一部分にすぎません．毎日搬送されてくる多数の救急患者の診療や各領域の専門的治療は，コロナ禍の中にあっても一日も休まず粛々と行われていました．ここに示した論文は，そうした日々の活動の中から，問題点を見つけ出し，調査し，考察した結果です．日常的に数多くの患者を診療しているからこそ気が付く貴重な視点であり，同様の事例に遭遇した多くの医療従事者に役立てていただけるものと思います．

今年当院が経験したことの一つに脳死下臓器提供があり，この経験のレポートも掲載しています．コロナ禍の中でしたが十分な感染防止対策を取ったうえで全国の移植施設から医師に参集いただき，提供された臓器は各々移植されてレシピエントの命をつないでいます．各施設・患者さんから多くの感謝の言葉をいただき，改めてドナーへの感謝と移植医療のすばらしさを実感しました．救命救急センターをもつ病院として今後も臓器提供する機会が増えてくると思われます．

コロナ禍の中で様々な活動が制限された年でした．多くの学会がWeb開催となり，臨場感の点では物足りないものの，場所と時間の制約なしに普段の学会以上に多くの発表を聴講できるメリットも実感しました．リモート診療の話題も多く耳にするようになりました．診療は本来患者さんの間近でコンタクトを取りながら行うもので，オンラインにはなじまない部分が大きいのですが，感染リスクやアクセスの利便性を考慮すると，今後はさらに推進されていくものと思います．これらを含め，アフターコロナの時代においては様々な分野で変革が起こるでしょう．当院としては，患者に向き合うという医療の本質的なところは変えずに，そうした変化にも柔軟に対応していかなければいけないと感じています．